



酒井 邦嘉 教授

(総合文化研究科)

92年理学系研究科博士課程修了。博士(理学)。ハーバード大学医学部リサーチフェロー、総合文化研究科准教授などを経て12年より現職。多言語習得のメカニズムや効果を脳科学的に研究している。

自己相対化で発想豊かに

人間の脳には多言語を習得する能力が備わっています。60力国語を話したというあるドイツ人の脳を分析した報告によると、言語をつかさどる領域の一つである45野の体積に左右差が大きいという特徴があります。英語を習い始めたばかりなのに英文法を得意とする中高生にも、同様の傾向が見られます。この特徴と多言語習得能力とに因果関係がある

かはまだ分かりませんが、45野の柔軟さが多言語習得に関わるのではな

いかと考えています。人間の脳から見れば、あらゆる言語は「人間の言葉」という一つの機能で、表面的にドイツ語や日本語などと分類されるのにすぎません。東京方言(共通語)や関西弁などが「日本語」なのと同様です。初修外国語も「同じ人間の言葉」ですから、

特に身構えることなく、考え方や文化の違いを楽しみましょう。

スペイン語圏で1年間ホームステイした高校生が帰国したら、特に使わなかった英語の技能も上達している驚いたと言っていました。脳が新たに言語を受容する時、既知の言語に対しても鋭敏に反応するようになると考えられます。つまり初修外国語を習得すると既修外国語、さらには日本語の表現までもが向上するという利点があるのです。

さらに、自分と異なる言語を選択した学生との交流を通して、多様な価値観を共有できます。皆が英語だけを履修すると優劣が気になります。が、外国語を複数学べば比較は無用です。

英語にもっと時間を割いて、英語以外の外国語は必修から外すべきではないかという意見もあります。しかし、初修外国語を学ぶことによる波及効果を忘れてはいけません。多数の言語の存在が多様な人々や社会を支えているのです。多様な生物種がいる生態系の方が、2種のみものよりはるかに安定です。英語の重要性が増したとしても、その他の言葉が必要になることはありません。これからの人材育成では、「英語でなんとかなる」のでなく、多言語ができる人材がさらに必要となるでしょう。それが健全なグローバル化で

す。

そもそも、「世界共通語」は意味を持ちません。言語は世代や地域によって常に変化するもので、仮に世界共通語を作ったとしても、すぐ方言が生まれて別言語になるでしょう。

実際に初修外国語で会話したり考えたりするには、大学の授業時間だけではまったく足りません。授業時間は他の科目との兼ね合いで決められているにすぎません。本気で外国語を習得したければ、毎日その言語

の音声に触れて、単語より文で覚える必要があります。語学に王道はなく、効率よく身に付ける方法はありません。

最後に「2より3以上」という考え方を紹介します。二つの言語では自己と他者の対立で終わりがちですが、三つになって初めて自分の言葉を相対化できるようになります。「三人寄れば文殊の知恵」などのことわざにもある通り、常に「3以上」をヒントに考えると、発想が豊かになることでしょう。(談)